

英国病理学会参加報告

稲熊真悟

愛知医科大学医学部病理学講座

このたび日英病理学会国際交流事業の一環として、2017年6月20日より23日まで北アイルランド、ベルファストにて開催されました英国病理学会 (Belfast Pathology 2017) に参加させていただくとともに、ベルファスト市内ではRoyal Victoria Hospital、Queen's University Belfast を、学会終了後は、ロンドン市内において The Royal London Hospital、および The Barts Health NHS Trust Laboratory and Blizard Institute の施設を見学させていただきました。

ベルファストは北アイルランドの東岸に位置し、タイタニック号の建造で有名な都市です。学会はウォーターフロント・ホールにて開催され、様々なシンポジウムや特別講演が企画されており、活気あふれる研究活動の数々に、非常に刺激を受けました。私は、主に next generation sequencing に関連した演題を聴講し、外科病理検体を用いた遺伝子解析の現状と今後の展望、および腫瘍細胞の遺伝的多様性の構築に関して、詳しく学ばせていただきました。発表は Technical advances; Gastrointestinal; Cellular/molecular pathology のセッションにおいて口演形式にて行い、座長の Dr. Grabsch と Dr. Arends より詳細な質問・コメントをいただきました。また、ベルファスト市庁舎でのレセプション・パーティーや、タイタニック博物館で催されたカンファレンス・ディナーに参加した際には、英国病理学会会長の Dr. Quirke をはじめとする様々な先生方とお話させていただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。

イギリスの病院における病理診断業務は、それほど日本の病院との差異はないように思われましたが、切り出し、標本作成、免疫組織染色、また、細胞診のスクリーニングなど、病理医のサポート体制がしっかりしている点が印象的でした。見学させていただいた病院は、いずれも近辺の複数施設から多数の病理検体を受け入れており、The Royal London Hospital では22人の病理専門医 (consultant pathologist) が、約65,000件/年もの病理組織診断を、専門領域ごとに行っているとのことでした。イギリスでは、consultant pathologist となるためには、日本と同様に専門医試験に合格する必要があります。試験はH&E標本、および免疫組織染色標本を用いた外科病理診断のみであり、病理解剖資格は追加で取得する点、また、合格率が20%程度と低い点など、日本の病理専門医システムとの違いを感じました。

病理学研究としては、地方の主要施設に凍結・パラフィン検体を集中的に集め、研究の基礎となる組織バンク構築を進めている最中であり、日本においても、今後、このような取り組みが重要になると思われました。

ベルファストでは、Trainee の Dr. Young と Dr. Macklin に、ロンドンでは、日本病理学

会総会（東京、2017年）に参加、発表された英国病理学会若手研究者、Dr. Ironside と Dr. Merve に案内をしていただき、いろいろなお話を伺ったり、美味しいレストランに案内していただいたりと、大変お世話になりました。この場を借りて、御礼申し上げます。

最後になりましたが、このような大変貴重な機会を与えてくださいました日英両国病理学会の関係者の皆様方に深謝申し上げます。今後も引き続き病理診断能力の向上に努めるとともに、研究成果を上げられるよう、努力していく所存でございます。今後とも御指導・御鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



英国の若手病理医たちと Royal Victoria Hospital 近くのカフェにて（筆者、左端）